

博士（文 学） 山 田 浩 貴

学 位 論 文 題 名

『万葉集』卷序論

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

万葉集二十巻の構造に関しては、その代表的な研究成果である伊藤博『万葉集の構造と成立』をはじめとして、従来の研究では当然のように成立論・編纂論と不可分のものとして検討されてきた。しかし、静態把握としての構造分析と、成立過程論・編纂資料論とをつき混ぜた従来の研究は、方法としての妥当性を主張し得ない。

本論文は、こうした反省の上に立って、純粹な静態把握としての卷序論を志向し、現在あるがままの万葉集二十巻の卷序にいかなる排列原理が働いているかを検討し、作者情報の度合いと所収歌の年代、という基準から、主として部立てと部立て冒頭歌の共通性によって結び付けられるところの根幹となる卷々、これに付属する卷々、及び付録的な卷々の三種類の組み合わせの中にこれを見出そうと試みたものである。

序章では、従来の成立・編纂論研究の動向に対して、その問題点を指摘し、本論が卷序論におもむく理由を表明する。すなわち、従来の編纂論が具体的な編者、編纂時期の特定を主目的とすることについて、情報の少なさという障害から、客観的なレベルで具体的な編纂事情に関する情報を特定していくことが非常に困難であると思われ、それに対して、卷序論は万葉集自体、その内部のみの静態的分析による考察が可能であり、しかもいまだ独立した卷序論としては議論が深められていない分野であることを指摘している。

第一章は「根幹となる卷々」の考察である。まず卷一と卷九の雑歌部を例に、部立冒頭歌同士の対応が集中の各巻の性格付けに関連する場合のあることを論じ、以下、卷二と卷四の「相聞」冒頭歌が、「仁徳天皇をめぐる女性の歌」として対応する可能性、「挽歌」部では、卷二、三、九の「挽歌」冒頭歌がいずれも「皇位に近くして亡くなった皇子に関する歌」という点で共通することを指摘し、これらを総合して、卷一、二、三、四、六、九において各巻部立冒頭歌同士に対応が見られ、それらの巻が卷一・二という核自体と、それを受け継ぐ性格の巻であることを論ずる。またこれら各巻は万葉集の根幹部として一つの強靭な線を形成しており、それらの巻の並び順が、作者情報の度合い（作者情報完備の巻一、二、三、四、六と作者情報が不完全な巻九）と所収歌の年代（巻一・二が最も古く、その拾遺、続編の巻三・四、続編の巻六へ）の二つの基準により整然と整理されたものであることを述べる。さらに、万葉集の基本的な巻序の構成は、これらの巻一・二から出る線が基本としてあり、その間に様々な性格の巻を挟み込むという形になっているという仮説を提唱する。

第二章では「付録的な巻々」が考察の対象とされる。まず、卷五と末四巻（巻十七～二十）とが性格的に近いものであることを確認し、これを付録的存在と認定する。さらにその位置については、末四巻は二十巻中最後尾に位置し、付録的というふざわしく、卷五も万葉集の最も中心的な部分である巻一から巻四に対する付録と理解することによってその位置が説明可能であるとする。次に、巻十五、十六共に所収歌の性格等が付録的というふざわしいものであることを勘案し、結果的に巻十五から巻二十までに部立を持たない付録的な巻がまとまるといえ、巻序を論ずる上で有効な説明ができると主張する。とくに前半部の分析は周到である。

第三章では「付属的な巻々」が検討される。このうち、従来巻十などとの関係がいわれる巻七について、その根拠はいずれも薄弱で、これを切り離してみる必要がある、とした上で、「雑歌」の位置

の占める大きさ、羈旅の歌、行幸從駕の作が多いという共通性から、卷七は卷六に付属するものと推定する。次に卷八については、その所収歌の卷六との時代的な共通性に加えて、卷一・二卷末歌と卷八卷頭歌との対応を見、卷八が卷一・二の続編であるという特徴を持つことを指摘し、卷八もそれにより卷七と共に卷六の後に置かれているとする。さらに卷十から卷十二の三卷は、「歌集出」歌が多い卷として一団をなし、卷一・二を受け継ぐ線上にありながら一面で「歌集出」歌の多い卷九と共通点を持つことから、卷九に付属する卷々と推定する。

第四章では残された卷十三・十四の考察が行われる。まず、卷十三は三大部立を完備する卷であり、注記等のあり方も卷一・二を受け継ぐ卷との共通点を持ち、加えて出典不記歌が主の配列となっており、所収歌が長歌であることとあわせて、出典不記歌がそれなりの重みを持った歌であることを示すと思われ、所収歌の点からも卷一・二に匹敵するものであるとし、両卷を受け継ぐ線上の卷として加えてよいとする。また、その位置は、卷一・二を受け継ぐ線の排列基準である作者情報の度合いに基づくとする。対して卷十四は東国の歌の集であることから、部立を持つ部分の最後、部立を持たない卷十五以降の前に置かれていると推定する。

終章では各章の検討を承け、万葉集二十卷の卷序のあり方についてまとめ、それが普遍的・一般的な論理によって説明可能であることを主張する。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである。（400字詰原稿用紙換算約688枚）

序章　卷序論を目的とする理由	1
第一章　万葉集の核となる卷と核を継承する卷	
——部立冒頭歌という視点から——	
第一節　部立冒頭歌という視点	19
第二節　「相聞」冒頭歌	25
第三節　「挽歌」冒頭歌	29
第四節　「雜歌」冒頭歌	34
第五節　卷一・二という核とそれを受け継ぐ卷	43
第二章　付録的な卷	
第一節　卷五と末四卷	60
第二節　卷十六論	75
第三章　他卷に対して付属的な卷	
第一節　卷七論	101
第二節　卷八論	115
第三節　卷九付属の卷—卷十、十一、十二論	125
第四章　卷十三と卷十四	
第一節　卷十三論	139
第二節　卷十四論	158
終章　万葉集の卷序についてのまとめ	164
【引用文献】	168

# 学位論文審査の要旨

主査 教授 身崎 壽

副査 教授 宮澤 俊雅

副査 教授 佐藤 錬太郎

## 学位論文題名

### 『万葉集』卷序論

審査委員会は、本論文が提出されて以後たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また口答試問を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、山田浩貴氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して文学研究科教授会に報告した。研究科教授会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

万葉集二十巻の構造に関しては、その代表的な研究成果である伊藤博『万葉集の構造と成立』をはじめとして、従来の研究では当然のように成立論・編纂論と不可分のものとして検討されてきた。しかし、静態把握としての構造分析と、成立過程論・編纂資料論とをつき混ぜた従来の研究は、方法としての妥当性を主張し得ない。

本論文は、こうした反省の上に立って、純粋な静態把握としての卷序論を志向し、現在あるがままの万葉集二十巻の卷序にいかなる排列原理が働いているかを検討し、作者情報の度合いと所収歌の年代、という基準から、主として部立てと部立て冒頭歌の共通性によって結び付けられるところの根幹となる巻々、これに付属する巻々、及び付録的な巻々の三種類の組み合わせの中にこれを見出そうと試みたものである。

本論文は、万葉集が複雑かつ複次的な過程を経て成立した文献と見なされるために、従来まったく無反省に癒合してきた卷序構造の論と編纂資料論とを、截然と分離すべきことを主張し、なおかつそれを自ら実践して見せた点に大きな研究史的意義がある。また、個々の章における分析、例えば第一章で論じた部立冒頭歌同士の対応の議論は、伊藤氏の提唱した問題を深化・発展させたものとして、今後の研究に大いに資するところがあると思われる。

一方で、先行研究批判の鋭さに比して自らの推論に甘さが感じられる、大局的な把握を急いだ反面、個別の巻についての考察がやや疎かになったところが見られる、等の問題点も見られる。また、残された大きな問題として、本論に示されたところの排列原理、その具体的な現われとしての卷序に具現された「知」のありようが説明されるべきであろう。今後、本論を土台としてこうした諸点の研究を深めることが要求される。しかしながら、本論はこうした研究の展開のための確実な基礎を築いたものといえ、また前提としての方法論的な批判は、現今の万葉集構造論に対する大きな警鐘として学界に一定のインパクトを与えることになるであろうと思われる。